

## 町で見かけた思いやり

小 四

わたしには、月日がたってもわすれられないことがあります。お母さんと妹と車に乗っていたときの話です。信号が赤になり、横だん歩道の手前で止まりました。青になった横だん歩道を、車いすに乗った人がわたり始めたのが見えました。まだわたり終わっていないのに、信号が変わりそうになったので、車いすの人、だいじょうぶかなと、心配になりました。

その時、近くを通った男の人が、横だん歩道をゆっくりわたり始めていた車いすをおして、手助けを始めたのです。

男の人は、ちよつと待ってくださいというふうに、手で右にも左にも合図を出したので、車いすに乗った人は、無事に横だん歩道をわたることができました。わたしはほつとしました。もし私が男の人と同じように歩いていたら、すぐに車いすをおして助けることができただろうか、と考えるみました。とても思いやりのあるあの男の人の行動は、心にやきついています。

同じように、わたしの家族にも思いやりを感じたことがあります。お母さんの去年のたん生日、家族でレストランに食事に行きました。土曜日だったので、レストランはとてもこんでいて、外で待つことになりました。すると、こしの曲がったおばあさん

が手おし車をおしながら近づいてきて、

「わたし、どこにいるのかしら。」

と言ったのです。近くにいた人たちは、そのおばあさんをじろじろ見ています。わたしは大人がまい子になるなんてと、おどろきました。それと同時に、おばあさんは家に帰ることができないのかも知れないと、不安な気持ちになりました。お母さんがそのおばあさんに「おうちの住所はわかりますか。」とたずねました。おばあさんは、町の名前も番地もはっきり答えました。お母さんは

「お店の人によべれたら、先に入って食べていてね。ちよつと心配だから、少しいっしょに行ってくるね。」  
と言つて、おばあさんといっしょに歩

いて行ってしまいました。

しばらくして店の人によべれ、お父さんと妹と席に着きました。メニューを見て、何を注文するか決めましたが、お母さんはまだもどつてきません。三人でどこまで行つちやつたんだろうねと、心配していました。お母さんの誕生日なのに、先に食べるのは悪いよな気がするなと思つていたら、お母さんが少しハアハアしながら、やつともどつて来ました。そして料理を注文してから、あのおばあさんの話をしてくれました。

少し歩いて行つた所に、地図の看板があつたので、おばあさんの言つた場所から、家は大きなスーパーの近くにあることがわかつたそうです。スー

パーまで送ってあげよう。そうすれば帰れるかも知れないと考えて、さらに歩き始めたお母さんに、おばあさんは「ずいぶん歩いて来たけど、お姉さんもどれるかい。」

と、何度も聞いてきたそうです。もどれるかどうかかわからないのは、おばあさんなのに。

心やさしいおばあさんは、出身は福島県だけど、今はそこに身内もいなくて、さい玉に一人でくらししていることなど、歩きながらいろいろ話してくれましたそうです。

やつとスーパーに着いた時、おばあさんは、「ずいぶん大きなスーパーですねえ。」と、初めて見たように言ったので、お

母さんはあきらめてけいさつに電話をしたそうです。来てくれたおまわりさんは、

「このおばあさん、前にも家に送っていただきますのでご安心ください。ありがとうございます。帰ろうか。」

と言って、連れて行ってくれたそうです。

お母さんは、おばあさんが事ここでもあったらと考えると心配でじつとしていられなかった、と言っていました。お母さんがとった行動は、とても勇気があっておどろきました。わたしも助けたいと思ったけれど、どうしたらいいかわかりませんでした。家に帰れなくなつたおばあさんをそのままにせず、

ずっと付きそつてあげたり、けいさつに連らくして最後まで見届けてあげたりしたお母さんがかつこいいな、と思いました。今でも時々家族で、

「あのおばあさん、元気にしているといいね。」

と話しています。

町でこまっている人は他にもたくさんいるかもしれせん。目や足が不自由な人、お年よりなどに、そつと手をかすことのできる人になりたいです。あの男の人やお母さんのような勇気があれば、わたしにも何か手伝うことができるはずです。そして、みんなが思いやりの心を持って見守ることができれば、もつとやさしい町になると思います。きれいなしせつや生活に便利な

店も大切ですが、わたしは、わたしたちの町が思いやりにあふれた町になるように、自分で考えて行動していきます。